

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370292

研究課題名(和文)トリニダードの知識人による詩・音楽・仮装を中心とした文化論の系譜とその遺制

研究課題名(英文) Vestiges of Cultural Theories Descended from Trinidadian Intellectuals:
Centering on Poetry, Music and Masquerade

研究代表者

梶原 克教 (KAJIHARA, Katsunori)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90315862

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：1962年に英国から独立したトリニダード・トバゴ共和国では、独立に至る過程で交わされた政体論に絶えず文化論が付随していた。本研究では、当時C. L. R. ジェームズとエリック・ウィリアムズを中心におこなわれた、国家における文化の位置づけに関する考察を、現在のトリニダード文化に照らし合わせて検証した。

調査と分析を経て、ウィリアムズが異人種間調停として導入した仮装(マス)と音楽(パン)が階級的差異を捨象したために、現在はそれらが観光化として否定的な効果を及ぼすいっぽうで、階級差の問題を強調したジェームズの論点が、現代のグローバル化社会における諸問題への解決に対してより有効であることを究明した。

研究成果の概要(英文)：Political debates in Trinidad around 1962 when it became independent were usually accompanied by cultural ones. This research has proposed to look at the cultural discussion held by Trinidadian intellectuals especially by C. L. R. James and Eric Williams concerning the location of culture in this emergent country. After reviews and analyses, the following hypothesis has been verified: (1) Williams as the first Prime Minister of Trinidad and Tobago promoted such festivals as Mas, Panorama and Dimanche Gras as means to mediate the conflict between different ethnic groups, while neglected class problems and left negative legacy of tourism which recent Caribbean intellectuals has tackled. (2) C. L. R. James, though energetically contributed to Pan-Africanism, put more emphasis on class problems, while focusing not on institutionalized national culture but on more secular culture such as cricket or cinema, which has exerted more influence on recent cultural theories.

研究分野：ポストコロニアリズムおよびメディア論的見地に立った環大西洋英語圏の文学・文化

キーワード：カリブ海文学・文化、英語圏文学・文化、文化論、ポストコロニアリズム、視覚文化、国際情報交換、トリニダード・トバゴ

1. 研究開始当初の背景

ポストコロニアル研究の拡大により、カリブ海諸地域に関する研究も盛んになってきていたが、なかでも研究開始当初の傾向は以下の3つに大別できる。

(1) 作家主義的研究。

まず、ポストコロニアルな状況の筆頭としてのカリブ海地域について、従来の文学同様に、作家主義な個別的研究（作家論）が最も多くおこなわれてきた。それは小説家、詩人などの作品を読み解くことで、各作家たちの一貫した傾向や特徴を導き出す研究だ。たとえば英語圏ではノーベル文学賞受賞者のデレク・ウォルコットや V. S. ナイポールなどはそうした研究の対象となりやすく、本研究者自身もウォルコットについて、以前の研究課題で作家論を試みたことがある。加えて、英語圏ではアール・ラヴレイスやカマウ・プラスウェイトら著名な作家についてはやはり作家論的に論じられる傾向が強い。またフランス語圏では、エメ・セゼール、サン・ジョン・ペルス、マリーズ・コンデなどについて多くの作家主義的論考が加えられてきた。他の語圏についても同様で、作家論は現在もおカリブ研究動向のひとつの中心となっており、同様の傾向の下に、これまで顧みられることのなかった作家の掘り起こしもおこなわれ始めている。

(2) 被表象と自己表象に関する研究。

カリブ海地域およびその住民（かつての被植民地住民）が、歴史的に西洋からいかに表象されてきたかという被表象に関する研究。これは E. サイドの『オリエンタリズム』以降、1980～90年代に盛んにおこなわれていたものの、減少傾向を見せ始めていた。いっぽう、カリブ海地域作家たちに共有される表象上の特徴に関する研究が増えるにつれ、西洋からの被表象にカリブ地域の作家たちによる自己表象を対置させることで、ポストコロニアル環境における表象のあり方を究明する傾向が強くなってきていた。たとえばヒュー・ホッジスは、個別の作家論を越えてジャマイカ全般に共通する詩学を論じており、リー・M・ジェンキンスの研究に代表されるような、作家や国の相違を越えたカリブ地域全般にわたる詩学の追求も、豊かな成果を残し始めてきていた。

(3) 環大西洋的文脈におけるカリブ研究。

ディアスポラ研究もここに含まれるだろうが、研究開始当初までの20年でもっとも急増していた傾向であり、本研究者自身もこの方向をひとつの軸として研究を進めてきた（過去11年にわたり受給した「環大西洋（圏）」をキーワードとする科学研究費補助金による研究）。なかでも、以前はアフリカとカリブの関係、ヨーロッパとカリブの関係、カリブとアメリカの関係が多く論じられ

ていたが、研究開始当初までの10年は、カリブの異なる語圏どうしの相互作用が考慮され始めている。つまり、環大西洋的文脈を経て、シャリニ・ピューリやヴィクター・フィゲロアの研究に見られるように、上記(2)へのフィードバックがおこなわれだしていたのである。

本研究はそうした背景を受け、カリブの中でも文化的影響力の強いトリニダード知識人たちによる文化論にいったん特化したうえで、それを環大西洋的の広がりの中に、かつ現代までのスパンでの歴史的な文脈の中に、位置づけようとして計画された。

2. 研究の目的

(1) 本研究開始まで上記1.(3)の方向で研究を進めてきたが、その文脈の中でも、「媒介性」「境界」「インターフェイス」という側面に注意を払ってきた。すなわち、1.(3)における研究の主流が、いわば表象の「内容」にまつわる研究であるのに対し、本研究者は表象の「内容」が伝達される「はざま」を問題化してきた。その際に追求されたのは、文化のインターフェイスとしての「言語態」「視覚態」「聴覚態」の問題についてであった。言い換えるなら、「言語態」「視覚態」「聴覚態」が、インターフェイスとして「内容」自体を規定する機能を果たしている点に着眼点をおいてきた。

それを受けて本研究では、これまでの研究成果である個別のインターフェイス（表現媒体）どうしの関係性を歴史的に布置し、それらの相互作用を考察することを目的としている。具体的には、「言語芸術」と「音響芸術」と「視覚・身体芸術」との関係性が、トリニダードという特定の国で知識人によって歴史的にどのように位置づけられ、どのように実践されてきたかを究明する。なぜトリニダードかという点について補足すると、当地はカリブ海地域において独立する1962年前後から、カーニバルという国家的文化政策が他国より強く打ち出された国だからであり、国家独立にいたる過程において、C. L. R. ジェイムズや初代首相エリック・ウィリアムズといった論者たちが、その文化理論を実践との関係で捉え直そうとしたと言われているからである。まとめるなら、本研究はより新しい研究動向である1.(3)および研究者自身の研究成果を踏まえて、1.(2)のテーマにフィードバックして、それぞれをあらためて循環的に照らし直すことを目的とした。

(2) 具体的には、研究期間内に次の2点を明らかにすることを目的とした。

歴史研究の分野では著名であっても、こと文化論の領域では従来の研究でおろそかにされてきたエリック・ウィリアムズと C. L. R. ジェイムズの文化論を収集し、体系化する。1962年前後から現在に至るまでのトリニ

ダードにおける文化行事（パノラマ、マス、カリプソモナーク）を調査し、上記2者の論と実践形態との整合性および相違を明らかにしたうえで、両者の文化論の21世紀的価値を見極める。

本研究が対象とするエリック・ウィリアムズおよびC. L. R. ジェームズは、ともに歴史研究の領域ではよく知られた存在であり、前者は『コロンブスからカストロまで：カリブ海域史 1492 - 1969』と『資本主義と奴隷制』が、後者は『ブラック・ジャコバン；トゥサン＝ルヴェルチュールとハイチ革命』が、それぞれの主著とされ、歴史分野での研究は盛んにおこなわれている。いっぽうで、両者が新聞紙上や雑誌上や講演でおこなった文化の役割に関する発言や、後者が残した『境界を越えて』という文化論については研究があまり進んでいない。それゆえ、トリニダードの西インド大学をはじめとするアーカイブを調査することで、それらの論考を掘り起こしあらたに考察する事を通じて、本研究は両知識人に関する従来の研究からもれ落ちている部分を補うことを目的とした。

(3)これまでの研究課題においても現代批評理論の成果を利用してきたが、カリブ文学・文化研究においてそうした理論的アプローチがなされることは非常に少ない。それゆえ、ジュディス・パトラーの仮説論やヘンリー・ルイス・ゲイツ Jr.の擬態論等をはじめ新しい批評理論の成果を応用することで、批評理論がなかった時代にウィリアムズやジェームズが思考していたことにあらたな光を当て、その現代的価値を発掘する事を目的とした。

3. 研究の方法

(1)日本で入手不能な資料の海外での収集とその分析：

2013年度には「愛知県立大学学長特別教員研究費」を利用して、米国にあるC. L. R. ジェームズに関する資料の収集・分析をおこなうが、本研究では米国で入手可能なものを西インド大学で収集する。同時に本研究費による理論書の収集・読解を通じて両資料の架橋を試みる。

2014年度にはトリニダードの西インド大学セント・オーガスティン校で、エリック・ウィリアムズ・コレクションを中心とした現地のみで入手可能な資料の閲覧と複写をおこなう。

(2)トリニダード・トバゴ共和国における文化行事の実地調査とその結果分析：

2014年度に集中的にパン・ヤード（日本の甲子園高校野球のような、地域ごとに順に勝ち上がり全国大会がおこなわれる、スティールパンを中心とした音楽の大会のための地域別の練習所）での調査と、マスカンプ（仮

装の衣装デザイン・制作所）そしてカリプソの実践について実地調査をおこなう。また、2010年代のトリニダード文化の変容を調査し、分析の参照枠として設ける。

(3)学会（国内・国際）への出席・発表を通じた立論の精度の向上：

研究期間内に、年間最低1回の学会発表（研究期間内に2回の国際学会発表）をおこない、研究途上での内容チェックをおこない、研究の精度を上げ、かつ海外への情報発信をおこなう。

(4)理論的考察：

上記(1)～(3)を踏まえ、年度ごとに調査・資料収集の結果を分析し、それに対する外在的な現代批評理論の知見を踏まえたうえで、総合的な仮説の形成と立証をおこなう。

4. 研究成果

(1)資料の収集と現地での調査について

2013年度に「愛知県立大学学長特別教員研究費」により米国のロバート・ウッドラフ・ライブラリーにてC. L. R. ジェームズ関連の資料を収集し、そこで入手不能だったものが当初計画していた西インド大学セント・オーガスティン校（トリニダード）ではなく同モナ校（ジャマイカ）に豊富にあることが分かったため、計画を変更しモナ校で調査をおこなった。その結果、ダリル・ダンスによるジェームズへのインタビューテープ、1985年のインタビュー資料に加えて、西インド大学でおこなわれたジェームズによる講演“The Artist in the Caribbean”の初録など貴重な資料を入手し、ジェームズ文化論の変遷についての傍証が固められた。

2014年度に西インド大学セント・オーガスティン校所蔵のエリック・ウィリアムズ・コレクションを中心とした資料収集をおこなった。また同時期に並行して、現地調査もおこなった。それは、エリック・ウィリアムズが初代首相として推進したカーニバル関連行事に関するもので、現在もおこなわれているパノラマ、マス、カリプソモナークのそれぞれが、トリニダード独立当初にウィリアムズが意図した異人種・異民族間調停の役割が継続されているかどうか、また新たに生じている問題がないかを中心に調査した。加えて、カーニバル開催時期にこれまでにウィリアムズが設けた枠とは異なる活動が勃興しているとの情報を現地にて得て、フェーボ村へ赴き「オリーシャ」という儀式を調査した。これにより、後述のようにウィリアムズによる文化論とその政策の限界とその原因に関する傍証を固めることができた。

(2)調査結果を踏まえた分析・考察

環大西洋的文脈とカリブ諸地域に関する再考：

本件については、これまで(2012年度まで)の研究課題からの継続的側面が大きい。2013年度の学会発表「「可能」なる歴史の語られ方 *The Brief Wondrous Life of Oscar Wao* における語りの諸フレームについて」およびそれを論文へと昇華させ共著として出版した「フィクションと歴史記述 『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』試論」は、カリブのドミニカ出身米国在住の作家による小説を分析することで、カリブの歴史と21世紀的グローバル化以降の現状との関係を環大西洋的文脈で捉え直し、欧米主導のグローバルイズムが「現実」として提示するものが、カリブ的文脈においては「フィクション」にすぎないことを立証した。言い換えるなら、つまり西洋の歴史=物語が捨象してきたカリブの歴史=物語に「場所=余白を与える」装置としてのカリビアン=アメリカン小説が持つ文化的価値を明らかにした。

2013年の国際学会(ICCL)で発表した“Transcendence of Multi-layered Predicaments by Postcolonial Writers”、同じく国際学会で発表した“The Continuum Lafcadio Hearn Finds in the Americas and the Caribbean”、そして2013年の学会発表アングロ・カリビアンとアングロ・アイリッシュの詩学」と2015年に論文発表した“Duality in Derek Walcott’s Perspective on the West Indies”も、同様に、環大西洋的文脈におけるカリブ文学・文化の特質に関する研究成果であった。それらを通じて、表象の二重性(被表象と自己表象)がカリブ文学・文化の特徴の一つであることを立証し、それがアイルランドのポストコロニアル文化とも類似性を持つ点を明らかにし、さらに視覚に関するカリブ特有の記述(不可視なもの可視化)に関して問題提起をすることにより、従来の文字文化としての文学にとどまらない現代批評理論以降の問題系を指し示すことができた。

エリック・ウィリアムズの文化論・文化政策とその遺制がもたらした21世紀的問題について:

ウィリアムズは10歳時と35歳時の2度にわたりC. L. R. ジェームズに師事し、前者のオクスフォード大学博士論文は後者の影響のもとに書かれた。ウィリアムズは1956年に人民国家運動(PNM)のメンバーとして選挙に勝利し、1958年にはPNM機関誌の編集長としてジェームズをトリニダードに呼び戻したが、以後両者は決裂することになる。本研究ではその経緯と理由を追及した。

まず両者の教育的背景(イギリス的教育)と思想的背景(資本制と奴隷制の関係から見た歴史観)の共通点を、論文“A Study of Young C. L. R. James and Trinidadian Context in the Early Twentieth Century”で指摘した。また、西インド大学で調査した資料をもとに、PNM機関誌で連載されたジェームズの「悪意抜きで」というコラムが近代美術や近代史や女性問題など広範囲の概念を扱っているのに対し、同

誌のウィリアムズによる「博士は語る」という連載コラムでは、ジェームズが提示した概念の枠を、文化的なテーマに即して具体的に述べたものであることが、つまりこの段階での両者の見解の一致(もしくはウィリアムズのジェームズへの追従)が明らかになった。PNM機関誌の調査によりさらに明示されたのは、以下の通りである。すなわち、ウィリアムズは、たしかに教育を受けた中産階級と黒人、インド系移民の架け橋となることで政治的に成功したのだが、それはあくまでカーニバル文化を人種・民族間調停としてガス抜きのように利用して、中産階級の利害を中心においた政策にすぎなかった。というのも、国民向けにナショナリスト的側面を強調するウィリアムズは、自身の思想的背景に反して、国際的には非社会主義者というイメージを保ち、大衆が望むように海外からの投資と経済成長を維持しようとしたからである。

ウィリアムズが利用したカーニバル文化における「視覚・身体芸術」は人種観・民族間の「目に見えて明らかな」差異を際立たせ、各人種・民族のアイデンティティの発露とすることで、たしかにガス抜きの役割を果たすことはできた。また、パノラマのような「音響芸術」は言語的分析を拒み、漠然とした印象を残しやすいために、国民の一体感を醸成しやすい装置として利用しやすかった。それゆえウィリアムズは中産階級を中心としたカーニバルの観光化を、大衆の欲望と一体化させる形で成功したのだといえる。

しかし、トリニダード独立当初に築きあげたそうした国の形が、現在の観光産業に依存するいびつな国の有り様の源であり、ウィリアムズ自身が促進したカーニバルの諸形態(文化による異人種・異民族間調停)も、現在は観光客の集客を主目的とし、国内の社会的機能を果たしえなくなっている。そうしたウィリアムズによる負の遺制(新自由主義的資本とツーリズム)を広くカリブ的文脈で考察した研究成果が、2017年3月に発表した論文「赤と緑が交叉するところ カリブ作家にとっての歴史と風景の問題について」である。

C. L. R. ジェームズの文化論の変遷とその21世紀的意義について:

PNM機関誌など西インド大学で調査した資料から、ジェームズとウィリアムズの文化論の大きな相違は次の2点であると立証した。まず、ウィリアムズは個別の人種・民族による個別の文化形態がそれぞれ提示(並置)されることで、単純に共生の道が開けると認識していたのに対し、ジェームズは「特異性と普遍性」、「一と多」、「個人と社会」といった「個と全体」をいかに架橋できるかという問題系に着目していた点である。次に、ウィリアムズは述べたように、中産階級を軸とした多民族国家の成立を目論んだが、ジェームズは人種・民族間の差異に加えて階級的な差異を重視していたという点である。そしてそのふたつともが、ジェームズにあってウィリア

ムズに欠けていたクリケットというスポーツ文化への関心に起因していた。

「個と全体」については、ジェームズが PNM 機関誌に残した記事その他の資料に即して、以下のように分析した。ジェームズはクリケットを演劇、バレエ、オペラ、ダンスと同類の劇的なスペクタクルと定義づけ、古代ギリシアから今日まで引き継がれてきた演劇との類縁性を指摘し、クリケットにおいてプレイヤーは厳密に個人として、しかしそれに劣らずある社会集団を代表するものとして、対峙し戦うことによって成り立っていると言っている。つまり、個々のプレイヤーの達成はその卓越した力量や才能のおかげではあるが、それは絶えずチーム=集団=全体の勝ち負けという組織的構造に依拠しているのだと。また、クリケットでボールに向かう打者は、自分のチームを代表しているだけでなく、あらゆる意図においてチームそのものなのだ。このように、一と多、個人と社会、個と普遍、部分と全体という基本的な関係が、クリケットをするものには構造として課されているという認識が、ウィリアムズとは異なるジェームズ視点であったと類推できた。次に、階級的差異へのジェームズによる着目については、上記の分析を踏まえた 2015 年の論文「C. L. R. ジェームズが見たポピュラー・カルチャーの可能性 エスニシティと階級を巡って」で、以下のように解明した。すなわち、ジェームズにとって「黒人」であるという人種の問題と「奴隷制」とは別物であるということである。「奴隷制」は近代世界システムにおいて重要な問題ではあるが、それを人種問題と混同してはならない。なぜなら、奴隷制と人種問題の混同は合衆国特有の症状で、とりわけ 1950 年代以降の合衆国では、ソ連との関係からイデオロギー的に階級問題が排除され、エスニシティの問題へと置き換えられてきたからで、それゆえ、奴隷制は必ずしも人種の問題ではなく、人種の問題が奴隷制と分離主義に関係づけられ利用されたに過ぎないということである。これがジェームズによる諸記述から導き出せる見解である。

同じく論文「C. L. R. ジェームズが見たポピュラー・カルチャーの可能性 エスニシティと階級を巡って」で明らかにしたのが、ジェームズがこうした認識に至る過程で重要な役割を果たしたのが、クリケットをはじめとする人種化されていない身体文化論である点だ。現代合衆国のヘゲモニーのもとに生きてると、そのイデオロギーを踏襲して奴隷制を米国内の人種問題の中心に据えがちだが、こと奴隷ということに関しては、合衆国に移送された奴隷の割合はわずかで、16 世紀から 19 世紀までにアフリカから移送された奴隷の割合をみると、カリブが 42% (推計 420 万人)、ブラジルが 38% を占めているのに対し、合衆国はたった 4% に過ぎない。にもかかわらず、奴隷制=資本制の人種問題

への置き換えが、合衆国のヘゲモニーに左右されて普遍化されている。ジェームズの念頭にあるのはその点で、ウィリアムズが合衆国的な資本制を前提としたのに対し、ジェームズは階級的な側面からそれを再考しようとしていたと結論づけることができた。

(3) 今後の展望

本研究で明らかになったのは、21 世紀的問題系に対処するに当たり、エリック・ウィリアムズよりも C. L. R. ジェームズによる文化論のほうが重要であるという仮説である。この仮説を立証するには、ウィリアムズとは根本的に異なる形で、ジェームズによる文化論が前景化している「身体」と「視覚」の問題を避けて通ることはできない。本研究課題最終段階において、「アダプテーションと映像の内在的論理 『ノーカントリー』における遅延を例に」という論文を共著図書で発表した。これは「視覚と共感」、「視覚と誤認」を批評理論を利用しながら考察するものだった。今後はこの論点をもとに、ジェームズがスポーツという文化(ウィリアムズが捨象した文化)に着目した理由と、その 21 世紀的適用性について考察することで、ジェームズの文化論が持つ可能性を探り、21 世紀的文化論の構築を目指すことができると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

(1) 梶原克教、「赤と緑が交叉するところ カリブ作家にとっての歴史と風景の問題について」、『多民族研究』第 10 号、2017 年、pp. 21-37. 査読あり。

(2) 梶原克教、“A Study of Young C. L. R. James and Trinidadian Context in the Early Twentieth Century”, 『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』第 48 号、2016 年、pp. 45-55. 査読なし。

(3) 梶原克教、「C. L. R. ジェームズが見たポピュラー・カルチャーの可能性 エスニシティと階級を巡って」、『多民族研究』第 8 号、2015 年、pp. 51-67. 査読あり。

(4) 梶原克教、“Duality in Derek Walcott’s Perspective on the West Indies”, *MULBERRY* 第 64 号、2015 年、pp. 19-30. 査読なし。

〔学会発表〕(計 7 件)

(1) 梶原克教、「赤と緑が交叉するところ カリブ作家にとっての歴史と風景の問題について」、『SES-J / MESA 合同大会シンポジウム「クロスエスニックの文学とエコクリティシズム」講師、2016 年 8 月 6 日、大東文化会館(東京都板橋区)。

(2) 梶原克教、“The Continuum Lafcadio Hearn

Finds in the Americas and the Caribbean”, Paper reading at 15th International Conference on Caribbean Literature, 2015年11月11日、Hilton Bahia, (Salvador, Brazil).

(3) 梶原克教、「C. L. R. ジェイムズの見たアメリカ」、日本アメリカ文学会中部支部2月例会研究発表、2015年2月21日、椋山女学園大学(愛知県名古屋市)。

(4) 梶原克教、「ポピュラー・カルチャーとインターエスニック/クロスエスニック C. L. R. ジェイムズをめぐって」、多民族研究学会第22回全国大会シンポジウム「インターエスニック/クロスエスニックの可能性」講師、2014年7月26日、大東文化会館(東京都板橋区)。

(5) 梶原克教、“Transcendence of Multi-layered Predicaments by Postcolonial Writers”, Paper reading at 13th International Conference on Caribbean Literature, 2013年11月13日、University of Panama, (Panama City, Republic of Panama)。

(6) 梶原克教、「アングロ・カリビアンとアングロ・アイリッシュの詩学」、日本英文学会第85回大会シンポジウム第4部門「環大西洋の脱植民地詩学」講師、2013年5月25日、東北大学川内キャンパス(宮城県仙台市)。

(7) 梶原克教、「『可能』なる歴史の語られ方 *The Brief Wondrous Life of Oscar Wao* における語りの諸フレームについて」、第30回日本アメリカ文学会中部支部大会シンポジウム「理論以後のアメリカ文学 移動と環境による惑星の再構築」講師、2013年4月21日、中京大学名古屋キャンパス(愛知県名古屋市)。

〔図書〕(計 2 件)

(1) 梶原克教、「アダプテーションと映像の内在的論理 『ノーカントリー』における遅延を例に」、岩田和男、武田美保子、武田悠一(編)『アダプテーションとは何か 文学/映画批評の理論と実践』(世織書房) 2017年、総286頁(pp. 119-145)。

(2) 梶原克教、「フィクションと歴史記述 『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』試論」、多民族研究学会(編)『エスニック研究のフロンティア』(金星堂) 2014年、総398頁(pp. 327-337)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梶原 克教 (KAJIHARA, Katsunori)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：90315862